

E-9

否定述語形式と進行相表現形式との相関および近代英語でのそれらの通時変化

かどた ひろし
廉田 浩

[要旨] 動作等を表す動詞の無標アスペクトが完成相の言語では、その動詞の現在形（非過去形）そのままでは現在進行中の動作等（進行相）を表すことができず、何らかの迂言的表現形式が用いられる。更に、そのような言語の一般的な否定文の述語形式として、完成相アスペクトを内在している動詞形態に否定辞を単純に付加する形式は用いられない。一方、同動詞の無標アスペクトが非完成相の言語では、上記のいずれも使用可能である。本稿では、脳内での否定文生成・解釈の実行プロセスモデルを仮定して、アスペクトと否定という異なる文法カテゴリの特徴間で相関が発生する仕組みの説明を試みる。次に、この説明の妥当性を調べるために、実際この2つのカテゴリの表現形式で初期近代英語期に通時変化を起こした英語に関して、否定述語形式を中心とした、所謂「do-support形式の出現」という観点から、先行研究の調査統計データを使って定量的に検証してみる。その結果、本稿における相関発生の説明が概ね有効であることを示すことができた。

1. はじめに

現代の主要な欧州言語の中で、「否定文の述語形式」と「Progressive（進行相）のアスペクト表現形式」という二つの文法カテゴリの特徴において、英語は大陸系言語と大きく異なっている。前者に関しては、多くの大陸系言語は、述語動詞(V)に否定辞(neg)を単純に付加した形式 V+neg/neg+V であるのに対して、英語は、助動詞(do)+否定辞(not)と動詞原形不定詞を使った特殊形式、所謂 do-support 形式を採用している。一方、後者に関しては、大陸系言語は、動詞現在形のままで一応現在時制の進行相アスペクトを表現できるのに対して、英語ではそれが困難で、迂言的な形式 be 動詞+V-ing を使わなければ表現できない。

また英語史の中でこれら二つの文法カテゴリ特徴の通時変化を見ると、ME（中英語）以前では、否定文述語動詞は V+neg/neg+V で、現在時制進行相も動詞の現在形で表現可能という大陸系言語と同じ特徴を有していたものが、EModE（初期近代英語）で上記二つの文法カテゴリの特徴がほぼ同時に変化し、PDE（現代英語）の特徴を持つに至ったとされている。（Ellegård(1953), Elsness(1994)）

上記のように二つの異なる文法カテゴリの特徴が、共時的にも通時的にも同じ言語分布を持つことは、偶然の一致というよりは、これらの特徴間に強い相関性がある可能性を示唆するものである。しかし、従来、この分野の多くの研究では、二つの文法カテゴリが独立して個別に扱われ、また do-support 形式の発展過程に関しては、「英語の統語体系に特異な変化が起こったため」という原因分析がなされている。

本稿では、否定述語形式と進行相表現形式間の相関性が発生する仕組みを推定するとともに、初期近代英語否定文等で do-support 形式の使用頻度が二段階で増加し定着していった現象が、次の手順で説明できることを示す。なお、推論検証のため、Ecay(2015)の研究成果データを参照した。

①現代英語のように「動作／変化」を表す動詞(Vd)の無標アスペクトが完成相のみの言語(P系言語)は、Vd単体では、非完成相中の継続相の動作実行状態の表現機能がないため、進行相を表わせない。更に、言語的否定操作の詳細分析により、P系言語のVd+neg/neg+Vd形式では「無動作状態／無変化状態」を表せないことが導かれるので、この形式で適格な否定文を構成できず、別の否定述語形式が必要なことを示す。

②中英語から近代英語への変化期にVdから継続相表現機能が失われていき、それを補うため当初、助動詞doを追加してdo+Vd原形不定詞形式を作り、継続相的特徴と時制標示等の述語機能を含むdo側に否定辞

を付加して適格性を確保した do_not 形式の否定文が増加したと推定。(do-support への変化 第1段)

③時間経過とともに do_not 形式が否定辞として文法化し、動作・変化以外の述語動詞 (Vs) の否定文でも、同じ形式の否定辞が汎用的に使われ始め、それが増加したと推定。(do-support 形式への変化 第2段)

④参照用に、初期近代英語の疑問文等の do-support 出現について、同様の考え方で説明できるかを検証する。

否定操作を分析する前に、まず言語の無標アスペクト (=基本アスペクト) について簡単に整理しておく。

2. 各言語の基本アスペクト系とアスペクトに関連した動詞の分類

Comrie(1976)によると、動詞のアスペクトとは、動作や状態変化などの時間変化する事態(動作態)をどのように捉るかという「時間軸上の事態変化の見方」とされ、動作態表示と視点・パースペクティブ表示とを統合したもの(林田(2007))とされる。一方、Langecker(1987)では視点・パースペクティブ表示に重点が置かれ、現代英語におけるアスペクトは動詞により '*Perfective*' と '*Imperfective*' の二種類に分けられる。つまり、この分類では、動作動詞の進行相が '*Perfective*' プロセス に含まれる。

本稿では、アスペクト体系と動詞の分類とを分けて考え、アスペクト体系では、事態の内部構成や時間変化の途中状態を内包的・部分平均的或は脱焦点化して叙述するような *Imperfective* と、事態・動作の時間変化の継続状態を表さず、時間軸上で一塊のものとして外延的或は輪郭の明確化・焦点化して叙述する *Perfective* とに大別する。また、*Imperfective* に対して「非完成相」の代わりに、英語や日本語での扱いが微妙な習慣相を除いた「継続相」を使用し、*Perfective* 「完成相」と対称させる。この二つは排他的な関係にあるので、完成相の形式を使って動作や変化の継続状態を表現することは困難であり、進行相は当然継続相に含まれる。

一方、動詞の分類では、動作や状態変化(時間変化)を表す *Dynamic* 動詞 *Vd* とそれらを表さない *Stative* 動詞 *Vs* に大別する。そして *Vs* は、時間変化を表さないため脱アスペクトの述語であるが、*Vd* の継続相と類似の性質(継続相的特性)をもつ。*Vd* と *Vs* は、同じ「動詞」に品詞分類されるものであっても、脳内の別部分で認知され、「別物」として扱われるため(Barsalou(2008), Ghio(2016))、通言語的に異なる文法的性質を示し、かつ相互に同系列(paradigmatic)な関係にないものと認識されていると考えられる。Langecker(1987)の '*Perfective*' .vs. '*Imperfective*' 分類は、本稿の *Vd*-*Vs* 分類に近いものと考えられる。

各言語で *Vd* の現在形または非過去形として一般的な肯定平叙文中で使用される形式に内在している無標アスペクトも一様に完成相や継続相に関連して大別される。本稿では、この無標アスペクトをその言語の「基本アスペクト系」と呼び、基本アスペクト系が完成相のみの言語を P 系言語、同じく継続相を含む言語を I 系言語と呼ぶことにする。各言語の基本アスペクト系に関する注目点として、第一は、管見の限り、主要言語で P 系は少なく、現代英語や現代日本語等がこれに相当し、他の多くの旧大陸系の主要言語は I 系である。第二は、P 系と I 系の簡便な判別方法は、動詞現在形によって現在時制進行相を表現できるかどうかで、P 系言語では迂言的表現が必要であるが(英語 : be ~ing, 日本語 : ~ている等)、I 系では不要という点である。

ここまでは、動詞を *Vd* と *Vs* との二極に分類してアスペクトの議論してきたが、動詞によっては *Vd*-*Vs* の中間位置にあるものや、同一の動詞であっても使用されるコンテキストによって、*Vd*-*Vs* の分類が変わる場合がある。「アスペクト」が視点・パースペクティブといった視覚的特性を重要な判別基準にしているため、動詞語幹の表す動作内容が視覚的に具体化しているものほど *Vd* に近く分類され、視覚的に動作が少ないもの、或は、多くの動作をまとめ抽象化したものほど *Vs* に近く分類される。

また、「非対格自動詞」や「経験者主語動詞」のアスペクト性や *Vd*-*Vs* 分類に関しては注意が必要である。これらについては、4.3 節で後述する。

3. 否定構文と否定操作に関する考察

否定構文として、(1) 文（または事象）全体の否定辞・句を使って構成する形式、(2) 述語句から否定述語句を作り統語する形式のうち、述語（動詞）に直接否定辞を付加する形式と、(3) 述語（動詞）+助動詞 の助動詞に否定辞を付加する形式がある。本稿では主に (2) の形式を扱い (1) や (3) の形式は補助的に議論する。P 系言語の現代英語（各 a）と I 系言語の現代ドイツ語（各 b）では、(2) のみが大きく異なっている。

- (1) a. He never goes to school. b. Er geht nie zur Schule.
(2) a. He does not go to school. b. Er geht nicht zur Schule.
(3) a. He will not go to school. b. Er wird nicht zur Schule gehen.

3.1 一般的な否定構文とその含意可能範囲および中心的反事象

人間は、発話の生成および解釈に際して、所有している言語知識の全体集合ではなく、現在の文脈などで決まるごく限られた関連する言語知識の（共起頻度により整理された）部分集合を事前に活性化し、それを使った発話前シミュレーションや発話予測（記憶内容とのマッチングと考えられる操作）を行い、効率よく言語生成・解釈処理を行っていると考えられる（Jonides(2008)）。しかし否定構文の生成・解釈の場合は否定事象そのものに該当する言語知識が用意されていないので、これをその場（on-the-fly）で構成しながらマッチングが行われると推定される。例えば、次のような否定文発話に対する通常の反応を考える。

『交通信号を見て「信号は赤ではない」と発話した場合、日本の社会通念として、「信号は青または黄色だ」という事象が想起され、「(故障等で)何色も点灯していない」という事象等は想起されない』

この例からわかることは、1) 交通信号として、赤・青・黄のどれか1つが点灯している Paradigmatic な肯定的事象集合のみが準備されている。2) 赤信号の否定表現は赤部分の消灯（否定事象そのもの）ではなく、赤信号以外で準備されている、青または黄信号の点灯事象（残りの肯定事象：肯定的含意）を表す。

この事例を一般化すると、標準的な言語的否定操作を (4) のように仮定することが可能である。

- (4) 文法的な規準および発話時の文脈で決まる社会・文化的な規準で選ばれ、相互に Paradigmatic な関係にある要素からなる集合 S からその要素 e を取り出し、それを否定した $neg-e$ を含んだ発話をすることは、集合 S から要素 e を除いた余集合 $S^*(e) = (S - e)$ の要素 e^* を含んだ肯定的発話をするとのみを含意する。即ち、 $neg-e$ を含む否定文は e^* を含む肯定文としてのみ解釈される。

また、 $S^*(e)$ を $neg-e$ の「含意可能範囲」とよぶ。

次に、ある事象を否定した発話をする場合に、意味のないし概念的にその事象の対極位置にある事象が一つある場合、これを「中心的反事象」と呼ぶことにする。例えば、「～は新しくない」に対して「～は古い」は中心的反事象となる。但し、「彼は小学5年生ではない」などのように、中心的反事象というものが（一つに定まらないため）存在しない場合もある。名詞述語文ではこのような場合が屢々ある。

一般的に、中心的反事象が存在する場合、それはある事象の否定発話に対して最も高頻度でかつごく普通に想起される肯定的事象であるため、適格な否定構文形式により中心的反事象が表現できる必要があり、もしそれができない場合は、その否定構文形式は文法的に不適格なものとなる。上記例文で示した、形容詞述語文や名詞述語文では、通常の否定構文形式で中心的反事象の表現が可能のため、文法的に不適格になることはない。しかし、基本アスペクト系が完成相の P 系言語（例えば現代英語）で動詞述語文のある種の否定構文形式では、中心的反事象が表現できないことがあり、文法的な不適格が発生する可能性がある。次にこ

のような場合について検証する。

3.2 P系言語である現代英語の否定構文

現代英語は、前述の通り基本アスペクト系として完成相を内在している。その否定述語形式として、動詞現在形にあえて否定辞 *not* を付けた形式、例えば *Vd :walk* 現在形に *not* を付加した *walk not* を仮定した場合、その含意可能範囲を考える。(4)で示した通り *walk* の Paradigmatic な別述語の肯定表現を含意しているので、これは完成相で *walk* 以外の *Vd* の集合 (*run, swim, ...*等々)になる。一方、*Vd :walk* 否定の中心的反事象(これが表現できなければ否定形式としては不適合)は「無動作状態」という状態表現であり、動詞の完成相形式は動作状態を表現できないため、完成相を内在した動詞の単純な否定形式の含意可能範囲外である。従って現代英語において *walk not* という形式は否定述語としては不適合となる。

(5)P系言語では、基本アスペクト系(即ち完成相)を含んだ動作や変化を表す動詞:*Vd*の活用形態に否定辞を単純に付加した否定述語の形式で適合な(標準的な)否定文を構成できない。

もしも基本アスペクト系が継続相を含めば(即ちI系言語)、その *Vd* 現在形は現在の動作状態を表現できるので、その単純否定形式の含意可能範囲に無動作状態も含まれるため、動詞現在形に否定辞を付加した否定述語により適合な否定文を構成できる。I系言語の現代ドイツ語では、(2)bのようにこれが可能である。

P系言語の動詞述語文で適合な否定構文を生成する主要な方法は二種類考えられる。第1は否定述語を使わず、(1)で示した、文または節全体を副詞や否定専用語句などによって否定する方法である。この方法は勿論I系言語でも採用できる。第2は動詞に完成相アスペクトを含まない叙述機能を追加した形式を生成し、この追加部分に否定辞を付加した否定述語による方法である。現代英語は第2の方法を採用していると考えられる。助動詞 *do* には、動詞の意味・概念は含まれず、アスペクト的には *Vs* と類似の継続相的な叙述機能が含まれると考えられる。例えば *walk* であれば、一旦 *do walk* 形式にし、完成相叙述機能のみの原形不定詞 *walk* ではなく、継続相叙述機能と時制標示等述語機能をもつ助動詞 *do* に否定辞を付加する(2)a :*do-support* 形式になる。元々「助動詞+動詞原形不定詞」の場合は、継続相叙述機能と時制標示等の述語機能を含む助動詞側に否定辞を付加する形式(3)になる。但し、一般動詞の中で、動作や状態変化を表さない *Vs* では、基本アスペクト系の影響はないので、それらも含んだ大多数の一般動詞の述語による否定文で *do-support* 形式が使われることになった現象に対しては、別の変化メカニズムを考える必要があり、これを含めた *do-support* 形式の出現については次節以降で再検討する。

4 英語史における *do-support* の出現と基本アスペクト系の変化

4.1 近代英語初期の *do-support* 形式出現頻度変化に関する先行研究と本稿提案との関係

初期近代英語:16-17世紀(以降cと略記)の *do-support* 形式の出現と定着に関する先行研究のうち、コーパス開発やデータ収集などによる使用頻度変化の実態調査と原因分析を中心とするものと、原因分析のみを中心とするものがあり、Ellegård(1953), Kroch(1989), Ecay(2015)などが前者に該当し、Han(2000), Warner(2005)などが後者に属すると考えられる。このうち、Warner(2005)では、言語(当時の英語)の Register が変化したために新しい形式が出現してきたというやや特異な変化原因を提案しているが、他の多くは生成文法(特にミニマリストプログラム)の分析手法を使って英語の「文法体系ないし文法規則が変わってこのような変化が発生した」との分析を行っている。また、本稿のような進行相アスペクト表現形式の通時変化との関連性を検討したものはほとんどない。

一方、実質的に基本アスペクト系の変化を示す、迂言的な進行相表現の出現頻度の変化に関しては、例えば Helsinki コーパスを使った英語進行相に関する Elseness(1994)や、樋口(2009)の研究などから、やはり近代英語初期：16-17cに急激に出現頻度が増加したことが明らかになっている。即ち、この間に英語の基本アスペクト系がI系からP系へと変化したと推定される。

本稿の主張は「do-support 形式の出現は基本アスペクト系（つまり動詞の性質）の変化に起因するものであり、文法体系の大枠は不変である」というもので、二つの変化時期が概略一致していることは、この主張を肯定的に支持するが、主張の信頼性を上げるためには、より定量的な検証が必要である。

ここでは先行研究中、コーパスデータの扱いで恣意性が少なく、各種パラメータに対する統計の種類が豊富な Ecay(2015)の結果を主に参照し、各種統計に現れた通時変化の本稿の主張による説明可能性を検証する。

4.2 否定平叙文、疑問文および肯定平叙文での do-support 形式の出現の解釈

Ecay(2015)によれば、do-support 形式における助動詞 do は、地方語の使役助動詞から進化したもので、使役機能が徐々に漂白化され、脱アスペクトの Vs と類似の継続相的叙述機能をもつ述語句主要素になったと考えられる。また主要な do-support 形式は、初期近代英語で、否定文、疑問文、そして一時的・部分的に肯定平叙文に現れ、前二者では全動詞で使用されるに至り、後者の使用例は直ぐに消滅する。

まず、各文種で共通する do-support 形式への変化全般で重要になる次の時期区分を導入する。

I 期：最初期近代英語(16c)、II 期：初中期近代英語(17-18c)、III 期：後期近代英語以降(19c ~)

4.2.1 否定平叙文の do-support 形式の出現

Ecay(2015)によると、否定文の do-support 使用頻度の詳細な統計では、(6)のような二段階の変化をし、この変化傾向が存在する主要因として、 α :他動詞、 β :非能格自動詞、 γ :非対格自動詞、 δ :経験者主語動詞、といった動詞の種類によって do-support の出現頻度通時変化の様子が異なっている点が挙げられている。但し、各種類の具体例は、 γ :非対格自動詞 *arise, come, die, go, rise, stand*、 δ :経験者主語動詞 *care, dread, doubt, fear, know, like*、 α :他動詞 = δ 類を除く有目的語の動詞、 β :非能格自動詞 = γ 類を除く無目的語の動詞。

実際、否定平叙文における上記 $\alpha, \beta, \gamma, \delta$ 類の代表的動詞の平均的变化傾向は、(7)のように二種類に分れる。 α, β 類には動作・変化を表す Vd が多く、 γ, δ 類には状態・結果継続・存在を表す Vs が多いと考えられる。但し、非対格動詞全体を Vs 的*と見なす点や、否定平叙文の経験者主語動詞に Vs が多い点は 4.3 節で検討する。

(6) I 期：1500 年 0%から比較的緩い傾斜で増加し、1500 年代末頃 20-25%に達する。

II-III 期：1600 年頃から急に増加し 1700 年頃約 75%に達し、その後緩く増加 18c 末 90%到達。

(7) α, β 類は、1500 年頃 5%から増加し始め、1800 年頃 95%に達するという S 字曲線状の変化

γ, δ 類は、1600 年頃までほとんど増加せず、1600 年 5%から 1800 年頃 85%まで S 字曲線状に急増。

上記 (6) と (7)、および Vd と Vs の分布から、否定文に関しては、次のような変化過程が推定される。前述のとおり、述語動詞が Vd の場合、基本アスペクト系の変化で Vd+neg 形式は否定構文に使用できなくなるので、早期に do-support 形式が現れるが、述語動詞が Vs の場合その必要性がないため、約 1 世紀遅れで、否定形式 do_not の文法化が進み、その汎用化という形で do-support 形式に推移したと考えられる。

4.2.2 疑問文の do-support 形式の出現

疑問文の生成規則が「述語動詞を主語の前方へ移動させる」ではなく、「述語句主要素を主語の前方へ移動させる」であったと仮定すると、述語動詞が Vd の場合、基本アスペクト系の変化により動詞の継続相叙述機能が劣化したのを補うため、一旦 do+Vd 構造になった後、述語句主要素である do のみが前方移動するこ

とになり、I 期における疑問文の do-support への変化が完成する。II 期以降は、否定文同様に疑問文 do-support 形式の文法化が進展し、述語動詞が Vs の場合も do-support 形式に変化したと推定される。このような変化過程を推定すると、否定文とほとんど同様の (6) のような結果が得られるはずであるが、実際は (8) のように、I 期で到達する割合が 20-25% ではなく 40-50% となっている。(II-III 期は (6) と同様) その主要因として、(9) のように、疑問文では、 α, β, γ 類の変化傾向は (7) と同様だが、 δ 類が異なっている点が考えられる。同じ δ 類動詞が否定文と疑問文で異なる変化傾向を示す現象に関しては、4.3 節で検討する。

(8) I 期：1500 年 0% から比較的緩い傾斜で増加し、1500 年代末頃 40-50% に達する。

(9) δ 類は、1500 年頃 5% から増加し始め、1800 年頃 95% に達するという S 字曲線状の変化

4.2.3 肯定平叙文の do-support 形式の出現

一方、肯定平叙文でも、I 期に Vd の継続相叙述機能を補強するため do+Vd 形式が部分的に使われるが、Vd 述語の肯定平叙文で積極的に継続相叙述機能を必要とするのは進行相叙述の場合に限られ、こちらが be 動詞+Vd-ing 形式で表現され始めたので、do+Vd 原形 形式はその冗長性もあって文法化されず、II 期には消滅していったと考えられる。

(10) I-II 期：1500 年 0% から緩い傾斜で増加し、1600 年頃 6-8% に達した後、緩い傾斜で減少。

(11) α, β, δ 類は、1500 年頃 0% から増加し始め、1600 年頃 5-10% に達した後、緩い傾斜で減少。

4.3 非対格自動詞と完成相との関連性および経験者主語動詞の性質と Vd-Vs 分類

非対格仮説 (Perlmutter(1978)) によると、非対格自動詞節では動詞句の補語(目的語)位置にあった項が、spec 位置に移動して、主語になっていると考えられるので、通常は、旧情報を表し非焦点化される主語位置に新情報を表し焦点が置かれる元の目的語がきて主語になるため (Dixon(1994))、逆に非対格動詞側は非焦点化されていると考えられる。このことは、非対格動詞が、文頭 there 文や Locative-Inversion 文でも使用されることから傍証される。一方、完成相アスペクトの動詞は前述のとおり、その語彙にある動作や変化を外延的・明確に叙述する性質があり、継続相にくらべてより焦点化される。したがって、他動詞や非能格自動詞の無標アスペクトが完成相に変わったと認識されたあとでも、非対格自動詞では、その語彙が状態叙述の場合は言うまでもなく、動作叙述であっても無標アスペクトが完成相になっていると認識されにくく、しばらくは継続相と認識されていたのではないかと考えられる。前節で、非対格動詞を「Vs 的*」と記述したのは上記の意味である。

また、経験者主語動詞の上記の振る舞いに関しては、次の推論が可能である。英語では、経験者主語の人称分布は文種により偏在する現象がある。この現象の通時変化は少ないと仮定すると、COCA での統計から、Ecay(2015)と同じ動詞の経験者主語の人称の割合 (1 人称 % : 2 人称 % : 3 人称 %) は (12) のようになる。

(12) a. 肯定平叙文 (41 : 32 : 27) b. 否定平叙文 (59 : 9 : 32) c. 肯定疑問文 (20 : 61 : 19)

一方、認知心理学的考察 (Barrett(2017), Ghio(2016)) から、喜怒哀楽等々の心理的な経験の種類は、実は経験者の主観によって決まるものではなく、その経験の場の状況や条件による社会的約束事として概ね決まるものとされている。ただ、心理的な経験の有無は、経験者が 1 人称の場合は、自分の血圧・脈拍・呼吸数などの体感の継続状態として認知されるのに対して、経験者が 2-3 人称では、他人の外見上の微妙な変化と認知されるため、同じ経験者主語動詞でも前者では Vs と認知され、後者では Vd と認知される傾向がある。従って、1 人称主語が優勢な否定平叙文では概ね Vs と認知され、I 期の do-support 割合が相対的に小さいのに

対し、2-3人称主語が優勢な疑問文では概ね Vd として認知されるため、同割合が大きい。この差が影響して、平叙否定文の方が疑問文に比べて I 期末における do-support 使用割合が小さくなっていると考えられる。

5 まとめ

現代英語（動作動詞）の基本アスペクト系が完成相であることが、進行相表現の「be 動詞+V-ing」という迂言的形式や否定文の do-support 形式といった特異な形式の生成主要因であることを提言し、その妥当性を考察した。更にこの考え方を使って、初期近代英語での do-support 形式の使用頻度増加現象を定量的に分析した。中英語以前は基本アスペクト系が継続相を含むため、do-support 形式は必要ないが、中英語末から初期近代英語にかけてこれが完成相のみに変わったため、初期近代英語で動作動詞（Vd）で *do_not* 形式が出現し、これが文法化して、約1世紀遅れで、非動作動詞（Vs）にまで同形式が拡大使用されたという変化過程が考えられる。それにより、否定文などに於ける do-support 形式使用頻度の通時変化（二段階増加）の定量的説明が可能になった。

ただし、参照用に疑問文での do-support 形式出現についても否定文と同様な変化モデルを仮定し議論を行ったが、本稿の分析は不十分であり、今後、疑問文の生成プロセスを文内の情報構造などの観点から細かく分析し、この仮定の正当性を検証していく必要がある。

参考文献

- 林田理恵 (2007) 「ロシア語のアスペクト」南雲堂フェニックス
- 樋口万里子 (2009) 「英語の進行形構文の謎」九州工業大学大学院情報工学研究院紀要人間科学篇 22 巻 13-50
- Barrett, Lisa Feldman(2017) *How Emotions Are Made*, Pan MacMillan, London
- Barsalou, Lawrence W. (2008) “Grounded Cognition,” *Annu. Rev. Psychol.* 2008.59:617-645.
- Comrie, Bernard (1976) *ASPECT*, Cambridge University Press.
- Dixon, R. M. W. (1994) *ERGATIVITY*, Cambridge University Press, 111-142
- Ecay, Aaron William (2015) “Multi-step analysis of the evolution of English do-support,” Publicly Accessible Penn Dissertations 1049 <https://repository.u-penn.edu/edissertation/1049>
- Ellegård, Alver (1953) “The auxiliary Do: the Establishment and Regulation of its Use in English”, vol.II of *Gothenburg Studies in English*. Stockholm, Almqvist, Wiksell: Goteborg.
- Elsness, Johan (1994) “On the progression of progressive in early Modern English”, *ICAME Journal* No.18, 5-25
- Ghio, Marta and Marco Tettamanti (2016) “Grounding Sentence Processing in the Sensory-Motor System”, *NEUROBIOLOGY OF LANGUAGE* ed. G. Hickok and S. L. Small, Academic Press, 647-657 (Ch.52)
- Han, Chung-hye et.al.(2000) “The rise of do-support in English: implication for clause structure”, *Proc. NELS*. Vol.30, 311-326
- Jonides, John et al.(2008) “The Mind and Brain of Short-Term Memory,” *Annu. Rev. Psychol.* 2008.59:193-224.
- Kroch, Anthony (1989) “Reflexes of Grammar in Patterns of Language Change,” *Lang. Variation and Change* 1: 199-244
- Langnecker, Ronald W. (1987) *Foundation of Cognitive Grammar, Vol.I: Theoretical Prerequisites*, Stanford Univ. Press
- Perlmutter, David M. (1978) “Impersonal Passive and the Uaccusative Hypothesis”, In *Proceedings of the Fourth Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society*, 157-89. Berkeley Linguistics Society, Univ. of California, Berkeley.
- Warner, Anthony (2005) “Why Do dove: Evidence for register variation in Early Modern English negatives,” *Lang. Variation and Change*, 17: 257-280